

サラリーマンの生涯所得

サラリーマンの生涯所得はいくらぐらいになるのだろうか。労働政策研究・研修機構の調べによると、学校卒業後フルタイムの正社員を続けた場合の60歳までの生涯賃金（退職金を含めない）は、およそ

＜男性＞中学卒：2億円（45年間）

高校卒：2億1千万円（42年間）

高専・短大卒：2億2千万円（40年間）

大学・大学院卒：2億7千万円（38年間・36年間）

＜女性＞中学卒：1億5千万円（45年間）

高校卒：1億5千万円（42年間）

高専・短大卒：1億8千万円（40年間）

大学・大学院卒：2億2千万円（38年間・36年間）



(<https://www.irasutoya.com/>)

(https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/2021/documents/useful2021_21_p312-356.pdf) だということだ。

一方、納めなければならない税金は、夫は大企業勤務、妻は専業主婦、子供2人、持ち家という条件で計算すると、所得税、住民税で約4000万円、家族4人の衣食住等にかかる費用を1億6000万円とすると、消費税は約800万円となり、合計で約5000万円である。その他、家があれば固定資産税、車があれば自動車税・ガソリン税などが加算される。(https://president.jp/articles/-/433?page=1)

高校を卒業後どの道に進むかは、一つの大きな分岐点になるが、上の数字を参考に見てみよう。例えば、進学するには、それなりに費用も掛かるが、高卒と大卒の生涯賃金の差は5～6000万円あるようだ。近年では、奨学金の制度も充実している。出会う「ヒト・モノ・コト」も変わる。

そして、保護者の方は、君たちを養うために、働いてくださっている。改めて感謝したい。

「人生は自分に何を期待しているか」

『夜と霧』は、ユダヤ人精神科医ヴィクトール・フランクルのナチス強制収容所経験に基づいて1946年に出版された作品である。その一節に、「極限状態にあっても生きる意味を見出し、どんな状況にあっても、それを追求することをやめてはいけない。生きる意味を問うことは、自分を主語にして『私は人生に何を期待できるか』と考えることではなく、人生を主語にして、『人生は自分に何を期待しているか』を思索することだ。」とある。アウシュビッツに代表されるユダヤ人強制収容所の絶望の中で、生きる意味を追求することは、並大抵ではない。彼はその精神を持ち続けた結果、幸運にも終戦を迎えて解放され、92歳まで精神医学の研究に勤しんだ。

彼のこの考え方は、以前紹介した福山雅治の『家族になろうよ』の一節、「一歩ずつ与えられる人から与える人へ変わってゆけたなら」に通じるところがある。人生に周囲から与えられることを待つのではなく、人生が自分に対して期待していることを積極的に追求し、周りに対して何かを与えていける存在になること、その何かを考え、行動していくことの大切さを教えてくれる。それが「生きる意味」つまり「生きがい」につながっていくというのだ。先日3年生の就職希望者に話した「はたらく（働く）＝はた（周囲）をらく（楽）にさせること」にも通じる。

併せて、誰もがこの世に使命を持って生まれてきている。その使命が見つかったら幸い、その使命に邁進することが「はたらく」ことになる。だが、その使命は、簡単には見つからないし、これこそが自分の使命だと思って取り組んでも、実はそうではなかったということもある。見つからないまま人生を終えてしまうこともある。「自分の使命」とは、言い換えると「人生が自分に対して期待していること」に他ならない。それが自分自身で見つけられることもあるが、これまで出会った「ヒト・モノ・コト」、これから出会う「ヒト・モノ・コト」によって、見つかることもある。だから、その時最善だと思う選択を積み重ね、丁寧に生きて「はたらく」ことが見つければ幸い。いつでもやり直せる。挑戦しか勝たん！

「心配するより信頼することにした。失敗から学ぶこともあると思うから。」は我々の挑戦の一つ

始業式で生徒の皆さんにこの言葉を紹介した。これは、我々教職員の挑戦。君たちにも期待している。

We keep on trying. 挨拶日本一の高校・遅刻ゼロの高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩